

2:1 私は心の中で言った。「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」しかし、これもまた、なんと空しいことか。

2:2 笑いか。私は言う。それは狂気だ。快楽か。それがいったい何だろう。

2:3 私は心の中で考えた。私の心は知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけよう。人の子がそのいのちの日数の間に天の下ですることについて、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていよう。

2:4 私は自分の事業を拡張し、自分のために邸宅を建て、いくつものぶどう畑を設け、

2:5 いくつもの庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。

2:6 木の茂った森を潤すためにいくつもの池も造った。

2:7 私は男女の奴隷を得、家で生まれた奴隷も何人もいた。私は、私より前にエルサレムにいただれよりも、多くの牛や羊を所有していた。

2:8 私はまた、自分のために銀や金、それに王たちの宝や諸州の宝も集めた。男女の歌い手を得、人の子らの快楽である、多くの側女を手に入れた。

2:9 こうして私は偉大な者となった。私より前にエルサレムにいただれよりも。しかも、私の知恵は私のうちにとどまった。

2:10 自分の目の欲するものは何も拒まず、心の赴くままに、あらゆることを楽しんだ。実に私の心はどんな労苦も楽しんだ。これが、あらゆる労苦から受ける私の分であった。

2:11 しかし、私は自分が手がけたあらゆる事

業と、そのために骨折った労苦を振り返った。見よ。すべては空しく、風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

著者は「快楽」もまた、神がなければむなししいということを体験的に証しています。ここには世の人々が願うような楽しみを、良くも悪くもすべて記されていますが、それらを実体験した正直な結論が「すべてむなししいことよ。風を追うようなものだ。」というのです。

(哲学の歴史の中には、『神がいないのならこの世には価値基準がない。ならば我慢するよりも快楽を求めよう。』という主張もありました。実存主義という哲学を信奉するある人々も、『世の中はただ存在だけがあって普遍的な価値観などというものは無い』という主張のもとに、自分の内側だけの世界に浸ったり、快楽主義に陥り不道德な生き方を提唱するようにさえなってしまったのです。伝道者の書は、「神がいない」という前提を持つなら、そのような生き方を否定できなくなると論じているわけです。)

私たちは、ああなつたらいい、これが欲しいと色々な欲求や願望がありますが、そのような思いに感わされないようにしましょう。またここにあるように、事業の拡大、邸宅の建築、造園、農業、雇用者の加増、財産の拡充、資産の運用、芸術の享受などにいそしんでいる人は、むなしかつたということのないようにしましょう。それには、この書が後に記すように、「神を知る」とことと、神を恐れる」ことです。

①神のみこころは？(信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど)

②どんな思いになりましたか？(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか？(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか)

④この世にあって何を実践しますか？

